

Ⅶ-33 参加型PCM手法による鶏糞リサイクル対策の検討事例

(有) 環境とまちづくり 正会員 ○福田景子
(有) 環境とまちづくり 正会員 花岡史恵
日本建設コンサルタント(株) 正会員 澤田俊明

1. はじめに

近年、環境への市民意識の高揚、廃棄物処理法・ダイオキシン等対策特別措置法・悪臭防止法などの法整備の進展により、鶏糞等の野焼き・野積み等による処理が困難になった。また、鶏糞を用いた堆肥も耕作農家の減少等に伴う堆肥の供給過剰の状況にあり、鶏糞処理問題は今や全国的な課題となっている。徳島県上勝町においても、平成14年2月末段階で、13戸の養鶏事業者が年間約20万羽(出荷数)の養鶏事業を行っており、毎年2,400トンの鶏糞が発生しており、鶏糞処理問題に直面している。

本報告では、上勝町の鶏糞処理対策について、参加型PCM手法¹⁾を適用して、上勝町の鶏糞処理についてリサイクル対策も含めて検討を行った結果を報告する。今回のPCM手法の適用は、上勝町においては上勝町棚田戦略立案²⁾、上勝CO2削減計画に続いて3例目の適用事例となる。

2. PCM手法による鶏糞処理対策の検討

(1) 上勝鶏糞PCMの経過

上勝町での鶏糞処理対策立案のために、平成13年6月に地元養鶏事業者14名及びワークショップスタッフ3名からなる「上勝鶏糞リサイクル研究会」が組織化された。今回は、表-1に示すプレPCMを含む4回の「PCMワークショップ」の後、4回の「検討会」が開催された。PCM手法には、「関係者分析」³⁾「問題分析」「目的分析」「プロジェクトの選択」「PDM(プロジェクト・デザイン・マトリックス)作成」「活動計画表作成」の6段階があるが、今回の鶏糞処理対策検討におけるPCMでは、「関係者分析」「問題分析」「目的分析」の3段階までを行った。そして、「目的分析」段階で、目的系図において情報が必要な箇所について情報を収集し、その上で、対策検討会を4回実施した。

(2) 関係者分析

関係者分析は、想定するプロジェクトに関与が予想される参加者を、受益者・被害者・決定者等の類別項目により抽出するプロセスである。表-2に関係者分析の結果を示す。

表-1 上勝鶏糞リサイクルPCMの経過

項目	日時	参加者数	内容
プレPCM	2001、7/19(木) 19:00~20:00	13名	研究会での検討に関する意見交換等
第1回PCM	2001、7/31(火) 19:00~21:30	11名	PCM概要説明・「関係者分析」・「中心問題」の選択、ターゲットグループの抽出・「問題分析その1」
第2回PCM	2001、8/17(金) 18:30~21:00	11名	「問題分析その2」
第3回PCM	2001、9/3(月) 19:00~21:30	7名	「目的分析」
第1回検討会	2001、11/22(木) 18:00~20:30	12名	徳島県の鶏糞処理の方向性について(堆肥処理専門講師招聘)
第2回検討会	2001、12/5(水) 19:00~21:30	6名	鶏糞処理の資料調査等結果報告と意見交換
第3回検討会	2002、1/7(月) 19:00~21:30	7名	鶏糞処理装置について
第4回検討会	2002、2/2(火) 19:00~21:30	6名	鶏糞処理に関する意見交換

表-2 関係者分析

類別の項目	関係者
受益者	養鶏事業者、肥料扱い業者、耕種農家、柑橘(柚)生産者、A社、B社、人参作付け農家、香酸柑橘農家
被害者	近所の苦情、新興住人、県道(町道)の通行人、風下の家の人、観光客、養鶏事業者、上勝町役場
潜在的反対者	環境NPO団体、上勝町役場、上勝町活性化グループ(イメージダウン)
潜在的応援者	上勝町役場、畜産試験場、家畜保健所、C社、D社、農業関連団体
実施者	上勝町役場、養鶏事業者
監督、指導者	上勝町役場、徳島県、県家畜保健所、県畜産課、A社、B社

(3) 問題分析

a) ターゲットグループの選択

ターゲットグループとは「プロジェクトがその実施により正の変化を起こすことを意図する主たるグループ」⁴⁾であり、通常便益をうけるグループの中から選択される。今回のターゲットグループは「養鶏事業者」とした。

b) 中心問題の設定

PCM手法の問題分析は、「原因-結果」という因果関係に基づく問題系図を参加者で作る作業である。最初に問題

系図の出発点となる中心課題を参加者で設定する。検討の結果「たくさんの鶏糞処理ができない」が中心問題として選定された。

c) 問題系図の検討

ターゲットグループが直面する中心課題を出発点として、WS参加者により「問題カード」を作成し、参加者の合意を得て「原因－結果」の因果関係となるように整理し、問題系図として整理した。図-1は問題系図の一部を抜粋したもので、問題相互間の関係が「下位に原因、上位に結果」となるように整理されている。今回では、「たくさんの鶏糞処理ができない」という中心問題に対して、「堆肥化しても売れない」等の直接原因が抽出された。

(4) 目的分析

目的分析は問題分析にて得られた問題系図における「原因－結果」の内容を、「手段－目的」の内容に書き換えるプロセスである。問題カードの否定的表現を肯定的表現の「目的カード」に書き換え、目的系図として整理するもので、問題分析における中心問題「たくさんの鶏糞処理ができない」は、「たくさんの鶏糞処理ができる」という表現に書き換え、中心目的として設定される。また、直接原因についても同様に、原因カードの否定的表現を肯定的表現の「手段カード」に書き換え、手段系図として整理するものである。

3. おわりに

PCM 手法には、6段階の検討があるが、今回の鶏糞処理対策検討における PCM では、「関係者分析」「問題分析」「目的分析」の3段階までを行った。現段階では「目的分析」の直接手段である「堆肥化すると売れる」等の下位手段についての検討を、詳細の情報収集や勉強会等を併用して、4回の「検討会」において実施した。その結果、短期的には、鶏糞事業者で堆肥化する施策が提案され、長期的には、鶏糞以外の木材等も含んだ炭化処理により、地域内でのエネルギー循環も考慮した鶏糞リサイクル案が提案された。

今回のPCM手法は、個別に存在していた養鶏事業者間の意見を、事業者の総意として問題系図・目的系図に整理でき、その後の詳細検討に進めたことで、有意であったと思われる。この要因として、PCM手法が問題解決型の参加型手法に馴染む手法であることが挙げられる

【参考文献】

- 1) (財) 国際開発高等教育機構：開発援助のためのプロジェクト・サイクルマネジメント、p. 17、1997 年 3 月
- 2) 山中英生・澤田俊明・上月康則・鎌田磨人・石田健一ほか：PCM 参加型計画手法による棚田保全戦略の分析、環境システム研究論文集 Vol. 28、p. p. 255-266、2000 年 10 月
- 3) 1)では「参加者分析」の用語が使用されているが、ここでは、PCM－WS参加者と鶏糞問題の関係者を混同しないように「関係者分析」の用語を用いた

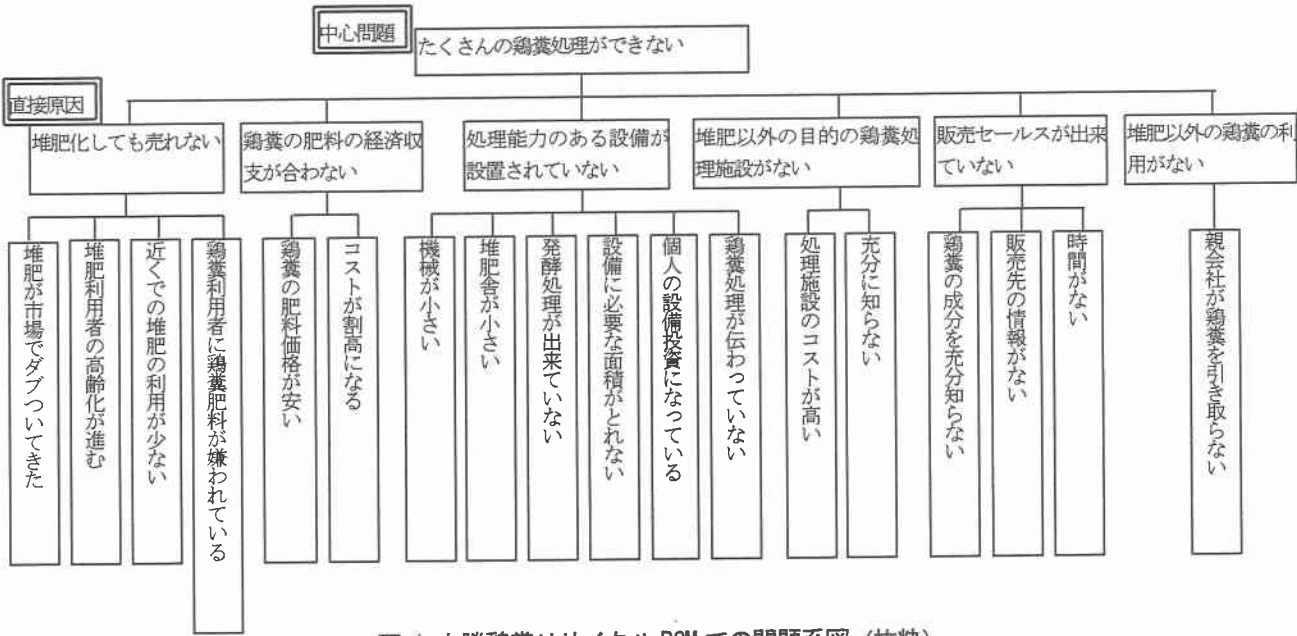


図-1 上勝鶏糞リサイクルPCM での問題系図（抜粋）